70 周年記念全道展 座談会（前期）

2014.11.8 15：00～　ユックにて

41 回から 54 回程度までの期間についての座談会

出席者
岡沼淳一、川本ヤスヒロ、竹岡羊子
伏木田光夫、渡会純价（50 音順）
若林直樹（北海道新聞社）

司会：木村富秋
記録：竹田道代
写真：宮地明人
総合編集：梅津　薫

ご挨拶

宮地：ただいまより全道展 70 周年に向けて、座談会をおこないます。川本事務局長よりご挨拶申し上げます。

川本：本日はお忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。70 周年記念の図録掲載のため、木村会員に司会していただきいろいろな話を伺いたいと思います。25 周年では座談会を、30 周年展では本田明二氏が創立当時の事を書き、40 回展で再び座談会という取り組みをしました。座談会は最近では 4 年前に定山渓で座談会を行いましたが、公式記録にはなっておりません。30 年の空白を埋める意味で今回の座談会を企画いたしました。また本日は、道新の若林さんにもご出席いただいております。

若林：来年 70 周年を向える全道展ですが、歴史を知りたいですし私自身も勉強したいです。全道展に出品している人や若い方にも大いにアピールできるのでは、と思います。

はじめに

司会：70 周年を迎え、全道展もご多分に洩れず世の中と一緒に高齢化していますが、今日参加の会員の皆さんは、20 年以上のキャリアを持つベテランで意気揚々と活躍しています。60 周年では、伏木田さんがこれまでの総括的なものを感懐に掲載しております。今回は、41～54 回に設定しておりますが、これまでのエピソードを時期にこだわらず自由に語っていただきたいと思います。はじめに伏木田さんにお願いいたします。伏木田さんは、17 回展で会員になっていますね。

伏木田：重要なのは全道展の骨格が、創立会員の小川原脩が掲げた「個が集団を突き動かす」ということなのです。かつて戦争画を描いていた画家たちが、苦い思いをして戦後を迎えた。再出発には、個が確固たる信念を持ち、自由に個がぶつかってよい、という考えでね、集団のための個であってはいけないのですね。それはボスを作ることへの嫌悪感にもなっている。

審査に参加すると、国松さんと小川原さんの激しいぶつかり合いをはらはらとして見ていたし、審査のあり方を教わったね。

そう言う点では、かつての工芸問題も絵画の連中が感情的に反対したわけじゃない。ボスを作らないという全道展の創立からの最も良い思想が浸透していて、今でも続いているのだね。

振り返って

司会：今のは歴史的な観点から全道展の主柱、骨格なのですね。全道展は、人の結びつきというのも会の大切なことですが、渡会さんは35〜37回の事務局長時代を振り返ってみていかがでしょう。

渡会：私は22回展で会員になり、その後事務局にかかわるようになるのですが、当時の事務局は任命制で10名の会務委員で仕事を分担したが事務局長がかなりハードで忙しい思いをしました。以前は任期が長かったのですが、3年制を設けました。

また、会計は疲弊しており、赤字対策として小品展を催したところ好評で大半が売却、残った作品も釧路の方に破格の値段で一括購入をしていただき、会の財政もかなり潤いました。

中央展について

司会：70年を迎える全道展ですが、中央から来た作家が創立メンバーに名を連ねているせいか、中央に出品する作家が多い。中央展を目指すことについてはいかがでしょう。

竹岡：私は結婚を機に九州から北海道に移り住み、すぐに全道展に出品しました。かれこれ半世紀も前のことですが、当時私も中央展を目指す若者の出品者の一人でした。伏木田さんをはじめ仲間の面々、皆とにかく熱かったですね！

私は18回で会員になりました。全道展出品者の作品レベルは年々向上していましたが、中央展の入選ラインは全道展の受賞級と厳しく、目線を上げ一喜一憂しながらも爽やかに充実した日々だったように思います。

伏木田：全道展に入選する事は中央への登竜門的な時期があったので、それは当然であったと思う。北海道で充分な仕事をすれば、全員が出すものだと思っていた。戦後サロン・ド・メが来て、はつらつとした表現に衝撃を受けた。全道展出品者の美学はローカルではなかったし、皆国際的な美学を持って作品を仕上げていたね。道展とは表現の内容や、方法が違っていた。また、組織のあり方もね。

全道展の魅力その1

司会：それでは、全道展の魅力というものを語っていただきましょう。全道展では、41回から54回まで10名の女性が協会賞または記念大賞を受賞していますが、女流の活躍も目覚しかったのではないでしょうか。

伏木田：（竹岡）羊子さんがその大きな流れの最後になるのかな。戦後の女性はとても勢いがあって、いろいろ問題もあったけど全道展の女流は颯爽としていて皆良い仕事をしていたね。また会友が力を持っていた時期もありました。

工芸問題

竹岡：70年という歴史の中で「工芸問題」という治まりのつかないことがありましたね！

伏木田：折原氏はすばらしい作家であり退会は大いなる損失であったが、全道展の理念とはかけ離れていたね。

司会：その話は審査不正の内部告発があり大変だった。当時私が事業部長の時、審査委員長の渋谷正己会員と道新の事業局とで討議し、臨時総会を行うにいたりました。

岡沼：私が教大函館分校の学生だったころから、折原さんや秋山さんなど結束が強かった。また学生の面倒見も良く、（学生は）先生の教えを踏襲していた。ただ、制作者の目がひと

つの方向に向いてしまうと、創造的な仕事が生み出されないですね。

伏木田：折原さんはある意味素晴らしい。自分でピラミッドを作り上げたのだからね。このことに情熱を持っていた。

渡会：道新に無記名で社長宛に投書があったり、まあ誰かは想像がつくのですが、あの頃の工芸は信用できませんでしたね。

ターニング・ポイント

司会：今から15年程前、曲がり角の公募展と言われ公募展不要論なども出ましたが、いかに若い人にとって魅力を持てる全道展を作っていくのか。

岡沼：私は36回展で会員になりましたが、帯広への巡回展や富谷道信遺作展で竹岡和田男氏や遠藤未満氏に出会うことが出来ました。地方にいる作家を覚えてくれて、師弟関係になくても将来性を見据えたアドバイスをしていただきました。部門が違っても育てられたという気がします。また、40～54回展頃の彫刻は種々の素材を扱う作家がお互いに刺激し合い充実してました。しかし、この期間に部門にとって大きな損失もありました。一つは、44回展直前に本田明二さんが、後を追うように山本さん、秋山さん、斉藤さんが逝き部門の創立、充実に貢献された先輩会員を失ったことです。また、同時期に表現方法で公募展の枠に収まらないということもあり、中江さんなど良い仕事をしていた何人かが退会したことです。その上、世代交代のバトンを引き継ぐべき桜井、小川、橘井さんと、力量のある若い会員の早世が続いたことです。そんな状況でも、次の石や具象の作家が続き、魅力ある作品を発表していると思うのですが。

伏木田：公募展を漠然とやっていると見えてこないが、良い才能を引き出すということは大切だね。スターを作らないと、会が生き生きしてこない。引き出すと伸びますね。彫刻は惜しい作家失ったね。絵画は良いよ、僕は、木村君や次世代の作家が育って来ているのがとても嬉しかった。

司会：40回展くらいですかね。

岡沼：絵画は近年充実していますね。

伏木田：彫刻ではキラ星のような大先輩が揃っていて、全道展は珍しい会だったね。

岡沼：そう言う点でも本田さんはピラミッドの頂点にはならない人だった。

伏木田：その頃の中江君は良い作品を創っていたね。

岡沼：今は体調が良くないようです。

司会：版画はいかがでしょう。

渡会：創立会員の川上澄生さん以降、あまり知られてはいないが北岡文雄さんがポイントになりますね。その後、尾崎志郎、大本靖、渋谷栄一が出品し、一原有徳に至る。渡会、玉村、少しおいて手島あたりからコンスタントに会員が増えましたね。

私は若くして事務局長を務めたせいか、各部門を把握していました。かつては総合で審査をしていたので、各部門に目が行届き、お互いに注目もしていたし作家同志の交流もあった。まあ総合での審査というのは今後無理だと思うが、悪くはなかった。

伏木田：渋谷、渡会の両氏が駒井哲郎の教えを受け継いだというのは大きいね。本格的な銅版画を北海道に広めることが出来たのは、のちのちにもとても幸せなことだね。

会場について

司会：続いて会場の問題ですが、全道展は丸井今井、近美と、37回から市民ギャラリーで展示を行っていますが、会場が変わった事で何かありますか？

伏木田：竹内豊が事務局長の時、三越で会員展をやったことがあって、それはたくさんの人が入った良い展覧会だったね。それに引き

換え、近美は小さくてびっくりした。入れ物と展覧会のギャップが大きくて、3段掛けがあったり展覧会が成立しない状況だったね。小谷博貞氏が板ばさみになって気の毒だった。その前後に国松氏と板垣元市長が話しをし、市民ギャラリーを作った。

渡会：市民ギャラリーは学校の跡地に作った住宅施設に、付属のような形で作った施設なのです。文化施設にしては、壁面の配慮がなく動線もいまいちで、付け焼き刃的発想で急ごしらえがいなめない。

司会：駐車場や搬入口も問題が多いですよね。

初出品の頃

司会：全道展に出品し始めた理由なのですが、川本さんいかがでしょう。

川本：私は41回展で会員になり、当時近所に住んでいた木村さんと飲み仲間になりました。私は高2の時、釧路で米坂ヒデノリ先生にデッサンを習っていまして、最初は50号3点を出品したがみごと落選。何も分からないで出品し、見に行って心臓が張り裂けるくらいの感動をおぼえ、パニックにもなりました。その感動は釧路ではなかったことでした。会場で熊谷先生と出会い、励まされて翌年高3で入選を果たし、以後は毎年入選をしていました。学生美術全道展では砂田、栃内両先生にとてもお世話になりました。

全道展の目線

司会：全道展は、個の作家活動と共にグループ展での活動も多く見られますが。

伏木田：振り返ると僕は函館の蛯子善悦と親しかったし、若い人たちにもあるのではないかな、思想的には緩やかな連帯感を持ち、結成しやすい人脈がある。それは極めてヒューマンで若いうちにしか出来ないことだし、全道展にしかないことだよね。

竹岡：そうですね！全道展の人間は歩幅が広いと自負する以上はインターナショナルに目線は高くと、かつての気張った考えもいまや普通！ごく普通の日常的な感覚に思います。個々の闘いという制作の中に消化されていて。

伏木田：今年の新鋭展は良かったね。あの人たちが仲間になってくれると、全道展はこれからも大丈夫だね。

渡会：構成も良く、とても見やすかった。

伏木田：以前のような受賞者ばかりではない、というのが成功したよね。

司会：本展と新鋭展と期間が余り無いという意見もあるが、そこを何とかクリアしたいし、こういう中から若い感性を本展にひきあげていきたいね。

ところで、今年は道新の展評を文化部の発想で公募展同士でしていましたね。

若林：いえ、それについては聞いていなくて、渡辺さんともう一人。美術に関わっている人なのかどうか。エッセイのような感じだった。個人的には変ですよね。講評まではいっていない、感想程度ですね。

司会：切り込むことも出来ないし、遠慮がちになる。お互いが良くなるために考えたのでしょうが、もどかしい気がしますね。

伏木田：試みとしては分からないこともないけどね。

渡会：試みとして一年間はやってみたいと岩本氏が話してくれたが、全道展の時には、どうなるんでしょうね。

伏木田：公募展同士ではなく、絵描きをセレクトして書いていたこともあったねえ、小谷博貞氏が昔書いていた。（公募展同士というのは）珍しい発想だよね。

竹岡：必要ないような気がしますね。長い間には、会の性格も変わりますし、仲良くしなくても、と思います。

審査について

司会：審査のあり方によって、会の考え方や姿勢が見えてくる。これについてはいかがで

しょう。いかに若い感性を拾い上げていくかも課題ですよね。

渡会：版画は健全に審査を行っています。発言の機会もありますし。ただ、会員であることの自覚が足りない。感情に流されないことが大切ですね。

司会：会の運営と厳選のバランスはいわば両輪のようなものですが、いかがでしょうか。全道展なりのものの見方、作品の評価基準、またマンネリ化はないでしょうか。

伏木田：審査にはもう少しディスカッションが密になるのが必要だね。このごろは（絵画の場合）基準が緩くなっている。自然発生的に入選人数が決まるのではなく、今年は締めようという気質が昔からあったがちょっと気を抜くと後からビックリするような絵まで入ってしまう。良いものは選ぶというのが基準なんだけど、審査の基準を作ることは大事だね。

司会：地域性が入ってしまう。エゴやセクトもね。会の審査としては警鐘をならしたいですね。

岡沼：彫刻の場合地域エゴはありませんね。小川さんが在命中は函教大の学生も随分出品していましたが、小川さんの眼の前で学生が落選するというかなりの厳選でした。その後絵画の３年問題に影響を受け、将来を見越して幅広く作品を見ようということになった。だけどこの頃、亡くなる方が続いて出品数も減り、今は横ばいですが会友には良い作品がある。やはり 50 点以上の出品は必要ですね。

彫刻を長く続けるには場所や道具の確保が必要で、それなりの覚悟を持って取り組まなければならない。ただ若い人は 1、2 回落選すると、もう戻ってこない。それが痛し痒しなのですが。で、この頃は将来性も見据えて入落をきめていますね。

伏木田：全道展の審査はしっかりしているよ。会員は、新しいものには敏感ですね。

渡会：技術的な話し合いはあるのかな。

伏木田：僕の周りではないですね。でも同世代の仲間は大事だよ、お互い競争しあうからね。

司会：川本さん、造形的な問題、質、号数制限などについてはいかがでしょう。

川本：全道展は大作も魅力ですが、70 周年記念展では見やすい会場にしたい。陳列可能な範囲で、意欲的な作品、熱気が感じられる作品の展覧会にしたいと思っています。

また、本展では大きさ云々より内容が無ければ落ちる。30 回展以前は厳選であった。4 年前の定山渓での座談会では、「厳しくありたい」と話し合ったのに忘れられ、会に余り反映されていないと思います。

司会：そうですね、65 回展の座談会の総括として、創立精神に基づいて厳選精神を徹底したい、と話し合ったことが忘れられて前に戻ってしまっている。

ZEN について

司会：広報誌の ZEN についてですが。全道展の現状をアピールする大事なものだと思います。

渡会：パンフレットなどを作っても出品を誘う口コミが必要ですね。仲間を増やす意識が大事だね。

司会：ZEN は協会の広報誌なので多く発信するのが望ましいです。

伏木田：会報ではないですからね。この所の方向は間違いではないよね。

今後の全道展

司会：ではこれからの全道展の在り方についてですが。

竹岡：会員が増えて、それぞれの意識や作品に対する思惑も変わってきています。受賞数の厳格化を望みますね。たまには受賞の数を絞って討議をするのも、全道展の態度として良いと思います。

伏木田：あとね 2 点入選の作家がいても良いと思うよ。良い作品は 2 点とるべきだね。メ

リハリが無くなって来ているし、2点入選の作家を作って押し出したいね。

竹岡：作品自体が、もう一押しを決定させる作品になるとよいのですがね。少数の力ではちょっと具合悪いですね。

司会：版画はどうでしょう。

渡会：いや、全道展として70年を迎える訳ですが、どこまで続けられるか、というのも課題です。実は50回展の時に解散論が出て、全会員で解散か継続かの投票をしたことがある。創立の主旨からいくと、けじめをつけるのも会としての在り方ですよね。

司会：確かにありましたね。

渡会：会員何年以上は同人展という型でやったりね。会員が多くなると、パンクしてしまう。

伏木田：僕は事務局長をやる前には会は解散あるべきかもしれないと思っていたが、事務局長をやってからは押し寄せてくるエネルギーを組織論で断ち切ることは出来ないと思うようになった。小野洲一がかつて、全道展は見てくれる人が多いから在籍することは価値があると言っていたね。個人で辞める人が増えるのは、そのような現象があっても仕方ないと思うが、組織として来年から止めようというのはありえない。

全道展の魅力その2

渡会：終戦直後の混乱期に衰退していた道展とは異なる主旨で出来た会だから、若いころは憧れましたね。

岡沼：全道展に作品を持ってくることは、他の作家の目も意識する。また並べる楽しさもあるし、大きな作品を持ってくることは、緊張感がある。制作の検証の場でもあると思っていますよ。

竹岡：本人より作品が前にあるというのが、はっきり見える。人間関係を後回しにし、自分で確かめる自由さがあるのですね。人間関係を優先して作品の価値判断が後回しになるのではまずいですね。

岡沼：自分の仕事を見つめなおさせてくれる作家が多いのが、全道展の魅力ですね。

彫刻を造る仕事がモノになってくると、良い先輩達と付き合いが生まれ、親交を深めることでさらに良い仕事につながる。その付き合いの中から、自分の位置を確認していくのですね。

終わりに

司会：会を続けるか解散かはこれからの問題で、今は決定できない。けれどいつの時代にも、挑む気持ちを持って作品を創っていく、というのが総括に尽きると思います。

70周年記念展は、会友を含めて全道展の底力を見せる良い展覧会にしたいと思います。

50周年記念全道審査風景

50周年記念全道展表彰式・懇親パーティ

70 周年記念全道展 座談会（後期）

2014.11.29 15：00～　ユックにて

55 回程度から 69 回までの期間についての座談会

参加者
木村富秋、渡辺貞之、森弘志、
波田浩司、竹田道代、川名義美、
石山和雄、若林直樹（北海道新聞社）

司会：川本ヤスヒロ
記録：吉川勝久
写真：佐藤仁敬（絵画）
総合編集：梅津　蕙

はじめに

司会：今日はお忙しい中、座談会に来ていただきましてありがとうございます。

今日は座談会の後期ですが、前回と合わせて来年の 70 周年記念展の図録に載せることになります。

座談会の様子は 40 周年の図録で載せていますが、以降、69 回展までありません。（50 周年の時には、座談会「展望」を ZEN25 号に載せている。）60 回展に伏木田先生が 45 回から 59 回までの様子を感懐として書かれました。その以前の図録には、25 回展と 30 回展の図録に掲載されています。そういう意味で、今日は大事な座談会になりますので、よろしくお願いします。

41 回展から 69 回展までということで、今日のメンバーでは、41 回展は、森さんと川名さんが一緒に協会賞を、竹田さんが奨励賞を受賞し私が新会員、木村さんが 40 回で会員になり 41 回展では審査しています。このころの審査はどんな雰囲気でしたか。

木村：40 回展で会員になったんですが、僕の年齢は全道展と同じなんです。会員になったとき丁度 40 歳。審査の話の前にその頃の状況をお話しすると、我々の一世代前、伏木田さん、野本さん、岸本さん、神田さん達の世代ですね。僕らよりちょうど 10 年前で、50 歳代ということですね。さらにその一つ前の世代でいうと、砂田先生、栃内先生、本田明二先生というあたり、その前は創立会員ですが、国松先生、小川先生、函館の橋本三郎先生だとかが元気な時だったんですよ。それで 41 回展を全体的にみると、その三つの世代が重層的な仕事をして、今考えると全道展全体の状況が輝いていた時代ではないかなと…そういう時に審査に参加してみたら、審査の中で丁々発止でガンガン激論を戦わせるのにびっくりした。審査ってこういうものなのかと…

その年に川本さんが会員になって、たまたま僕もその頃石狩に住んでいたので、「川本さん会員になったよ」って…その晩二人で飲んで、初めてですから審査のいろんなことを午前 1 時過ぎまで話した…そんな 41 回展でしたね。

司会：当時は創立会員も沢山いて、国松先生

と小川原先生とが激論を交わしたという話を聞いていますけれど、そういう時に森さんが協会賞を受賞しましたね。

森：今、古い話が出てきてハッと思い出したのは、大ベテランの創立会員がまだ元気で中心で活躍されていた。そういう風景は一般出品の20代半ばの僕らからみても実感しましたね。二つのことを思い出します

一つは、表彰式の場所が市民ギャラリーで行われていたということですね。立派な会場じゃないんです。随分沢山の人が集まっている中で、若い者が上げられて表彰式が行われ、僕は国松さんから協会賞をいただいた想い出があります。

もう一つは、創立会員が真ん中にいて、20代の者からみても「あっ、全道展は貧乏な団体なんだなと…（笑い）、それでいて唯一熱気のある場所なんだなと感じました。

司会：川名さん（彫刻部門）は出品してから協会賞を受賞するまでどのくらい…

川名：え～とですね、（最初は）大学の2年か3年の時に出したと思うので、その後茨城に行ったりで…6年くらいですかね…

司会：協会賞をもらって会友になって、その後しばらく会員になれなかったですね。20何年ですかね。そういうことから全道展をどう思いますか？

川名：腰を悪くしてしばらく作れない時期もあったんですが、再開してまた出品ということになったとき、なかなか会員になれないんで焦ったし、下からどんどん抜かれていくし、落胆もしたし、すごい暗黒の時代でしたね。（笑い）

司会：彫刻は厳しかったですかね。

川名：会員の方が少ないので、パーセンテージからいうと、1人休まれると、一人手を挙げるか挙げないかで当落が決まってしまうので、そういう意味では厳しかった。

司会：波田さんも後から協会賞をもらっていますが、どうでしたか？　高校1年2年で学生美術全道展に出して、最高賞の文部大臣賞をもらって、3年から全道展に出して…

波田：いえ、2年からです。2年で入選して、3年の時は受験があったので学生展も全道展も出さなくて、大学1年からもう一度出していって、何年か何十年経ってから会員になったか覚えていないくらい長い。（笑い）

木村：（波田さんは）古いよ～（笑い）僕が受付やってて、波田さんが高校生かな…ちゃんと作品を持ってね…まだ覚えているから、かなり前から出してる。（笑い）学生展出してたでしょ？

波田：学生展には大学時代は出してませんが、高校時代は2年間出しました。全道展は20年くらい出したんですかね…そして会員になりました。

木村：ということは、全道展の会員になることは大変だと言うことだね…

森：波田さんは、協会賞は2002年で、そのわずか5年後の2007年に新会員ということで、当時としては異例の早さですが、その以前の蓄積が十二分にあったということですね。

司会：ありましたね（笑い）…話は変わって、学生美術全道展ですが、若林さんがちょうど50回展の時に、学生美術全道展の目録に過去の授賞者記録を載せましたが、その当時のお話を少し話してください。…

若林：私が全道展の担当をしたのは50回の頃、本展の創立会員とか会員とか…名前しかしらない人もいましたが、美術館の方もいるし、全国的に有名な方もいた…本展の場合はそういう記録があったんですが、学生展の場合はそういう記録が無くて、どんな人が入ってるかなと、そういうことを調べまして、結構大変だったんですよ。うち（道新）の紙面を見たりしたんですが、その時、谷口一芳先生がいろいろ記録を持ってらして、それをコピーしていただいて、まとめたという記憶があります。谷口先生がいらっしゃらなければ、ちょっと出来なかったというところですね。川本さんの名前もあるし波田さんの名前もある。安田侃さんのような有名な方の名前が入っていたり、あっと驚くような美術館のある方がいたりということもありますけれど

も、そういう意味でやっておいてよかったなと思います。

司会：学生美術全道展というと、今回、審査委員長をされた竹田さんは、17回展ですか、油絵を出していましたが、いつ頃から版画に変わったんですか？

竹田：短大を卒業してからグループ展とかに出品していたので油絵は描いていました。版画を初めて30年近くになります。朝日カルチャーで銅版画をやり始めたので、全道展にも出す切っ掛けにもなりましたね。

司会：大学で専攻していたのではないのですか？

竹田：大学では油彩のほかに染織や彫塑なども履修します。版画は短時間ですが、米谷雄平先生の授業がありました。

司会：今回、審査委員長をして、最近の学生美術全道展の様子と竹田さんの時と違っていた点などありますか？

竹田：学生の方達が熱心で、講評会にも来て、（他の部門の講評を求められ）「版画の会員ですが、いいですか？」といって講評することもありました。意欲的で目が違う感じがして、学校で教えている先生達が熱心なのかなという気がしました。私が高校の時に出品した時は、美術の先生とかの指導も無く、仲間もいませんでした。今の生徒は幸せだなと感じました。

司会：学生美術全道展が終わって、第4回新鋭展がありましたが、工芸で2名出品されていましたね。去年、新会友になった阿部榮さんと福岡県から出品している阿部綾子さん。工芸は、新鋭展や学生美術全道展ではどうですか？

石山：新鋭展では、今回二人いたんですが、感性の高い作品が出てるなという感じは持っていて、レベルが上がってきているのかなと、私自身は感じています。

司会：今回新鋭展では、協会賞の人が出してなかったし、版画の人も一人出していなくてとても残念でしたね。工芸も会員が増えてきましたが、どういう感じで審査し、まとめていますか？

石山：審査自体の方法は変わりありませんが、古手から若手までが合体した形で審査していますが、まだ若い会員が古手の会員の意見に従うというところがあって、これからは、若手がもう少し活躍していかなければならないのかなという感じはあります。

司会：馬場さんや今回の新会員の方は若い方ですね。そういう若い方が、全道展の仕事を一生懸命するというのは非常に良い状態ですね。

木村：全道展の中の新鋭展の位置づけは大事なことだと思うね。学生展は自由に自分中心の作品を描いて良いと思いますよ。新鋭展は全道展が奨励した人で全道展の将来を託していく予備軍的な人選で、全道展の売り出す顔ですから、位置づけとしてはもっと厳しくあるべきで、さっきあった協会賞を受賞した人が出さないなんてことはあってはならないことだと思う。

司会：森さんは、どうですか？　遠くなので…新鋭展を観る機会などありますか？

森：以前にも受賞者展とかありましたよね。賞をもらうのが6月か7月で、大半の方が新たに創るって形をとるわけですよね。制作期間的に個人個人で事情もあるんだろうなと思いつつも、全道展（公募展）の場が芸術としての現場であり、アーティストとしての態度表明の場所である、それとその後に来る新鋭展がもう一つの態度表明の場所であるという認識が薄い方もいるのかもしれない。そこのところで若い人達ばかりを責めないで、我々として出来ることバックアップ出来ることがまだまだあるのか、どういう風に考えていくのかだと思う。確かに、魅力的な展覧会にしたいですよね。

司会：今回の新鋭展は20名くらいが出品しており、新会友、会友の方が多かったので、そういう意味では手慣れていて、搬入、搬出もスムーズで当番もきちんと行われました。

梅津：「受賞者展」から「新鋭展」に変えた。会員からみて、レベルが落ちたり、作品に対

する意気込みが感じられなかったり、そういうことで会員は批評精神を持っていたわけですよ。それではダメだ、これじゃいかんということで今回の新鋭展に変わって、選抜方法も変えて、会員が批評精神を持っているので、こうして新しく変えることで対応できていると思うんですよね。全道展は良い体質を持っているんだなと思いますね。

木村：それは大事なことですね。会員がその辺をどう見るか…ただ厳しくみるだけじゃなくて、外に向けた顔だからね。出品作家はその辺をしっかり意識して出してもらわないと…

さっき、森くんが言ったように、時期的にかなり難しい問題もある。6月に終わって10月の後半かい？　そういうところの会期選びも大同ギャラリーさんと打ち合わせて設定をもう少し考えても良いかもしれないね。

川名：自分が出したときは、協会賞をいただいたのは木彫だったんですけど、受賞者展に出したのは石彫だったんですよ。大同ギャラリーというスペースを考えたときには、そういう大きい物はダメだろう、木彫はあったんだけれど、スペースの合った大きさにしなきゃいけないということで、そこから石彫を創ったので確かにしんどかったですね。

司会：その時は受賞者展でしたか？（川名：そうです。）前に協会賞受賞者一人だけで個展ができた時もありましたね。

川名：（新鋭展は）全道展本展（6月）と近いので、この辺でとか言えるものなのかどうか…

木村：調整とれるんであればね。

波田：独立展とか日展とか自由美術もこの時期に重なっているので、そちらの方を考えている人には、新作なんてとても考えられないことですよね。

木村：中央に出している人が結構いるから、そういうことも考えなくてはならないですね。

波田：一ヶ月遅かったら、みなさん出せるかもしれませんね。

森：さっき態度表明の場っていうぼんやりとした言い方をしたんですが、別に全道展本展に出している大型とは別に、小品でも構わない。十二分な態度表明を出来るんだということも含めて、違う形であっても構わない。芸術作品として魅力的なものを是非という感じで、働きかけ呼びかけていければね。

司会：渡辺さんは、全道展にずっと出していて、前に聞いた話では協会賞をもらった次の年に落選したとか…

渡辺：いや、その時は協会賞の一つ下の賞ですね…厳しかったよね。もう出さないかと思ったり…真剣に考えたよね。そのとき奇しくも伏木田さんに会場で言われたのは、そのぐらいで出さなくなるのは、所詮そんなもんだと…人作りみたいなものを全道展はやってたと思う。こいつはこの後どういうふうに進歩して行くかという、一つの試しをされたようで、すごく嬉しかった。育てられたという気がする。そういうのが今果たして我々自身の中に、そこまで大きく包み込んで出品者を見ているかというと、なかなか難しいなと…

司会：伏木田先生とはたまたま会ったということ？

渡辺：特に親しくしていたわけではなくてたまたま。ただ後で聞いた話だけど、僕は賞を取ると次に落ちるというジンクスがあってね。それで顔を知られたんですよ（笑い）

司会：その当時だと38回展・39回展くらいですね。

渡辺：個人的な話しだけど、僕が負けず嫌いの人間だから、落ちたら、ちきしょうこのやろうという気持ちがあって、それが上手く出ていったということ…（今は）何か、展覧会外での一般の人との接触がないよね。例えば、栃内さんが、僕に「時間がないなら、時間をかけずに描ける方法を考えなければだめだぞ。」と教えてくれたのが強烈。それまで

は隅から隅まできちんと描いてたから、3〜4ヶ月じゃ描ききれないような緻密な絵を描いていたんですよね。そういうような先輩のアドバイスみたいなものが、展覧会中じゃなくても、たまたま栃内さんが深川に来た時に個展会場やグループ展会場でたまたま会って知り合いになっていく…そういう邂逅が今はあまり無いんじゃないかなと思う。

司会：全道展では講評会を行っていますが、講評会についてはいかがですか。

川名：結構彫刻のところにも（講評お願いしますと言って）来ますよね。「（私は）彫刻ですけど良いですか？」と言って。会員の方から言ってもらうのは学生達は喜んでますよね。

木村：前は講評集っていうのも出してたよね。あれとっても良かったんだけど、今にしてみるとやめてしまったのはとっても残念だね。あれをすごく楽しみにしている出品者がいた。地元の人なら講評会なんかにも来られるんだけど、地方の方なんかは来れませんからね…出来たらもう一回復活しても良いよね。

司会：講評集と講評会、両方行ったことはありましたか？

渡辺：両方で良いと思う。講評集がなくなった理由の一つに、強制的に当番制みたいに当てたこともあったんだよ。僕は、書きたい人が書けばいいと思う。その方が積極的な文章になる。

木村：当番制でも良いと思う。

渡辺：本来はね。

木村：それは会員の仕事ですから。

森：再開した初期の頃は、会員一人当たりの講評する担当作品が30〜40点と結構な数だったが、その分、5年に1回くらいにまわってくるサイクルだった。途中から（負担軽減のため、講評担当数を）10点前後まで少なくしたため、2年に1回は書かなければならなくなり、逆に負担感が増した。天秤に掛けてどっちがいいのかと思った。講評集を再開させたのは僕なんだけれども、もう一つの理由に、批評する側の会員の意識がばらついているということがあって、作品を選ぶという作業、批評に対してもっと責任を持つべきじゃないかという、そんな生意気なことを考えることがありました。手ぬるい審査がなされたりとか、手の上げ下げがおざなりになっているんじゃないか、本当に貴方はこの作品を良いと思っているのかという言葉を突きつけられたとき、言葉で返せるだけの強い意識で審査に立ち向かっているか…ちょうどそういう時期でもあったんですよね。

違う要因としては、臨時総会が開かれたりとかトラブルが多くて、現場の中で声を上げる空気が出来ない、会話、コミュニケーションが成立していないような空気が十数年前にあったときに、機関紙とか講評集とか、出品者と講評する側あるいは審査をする側との間を取り持つ何かが必要なんじゃないかなということで再開させました。再開させて、もくろみとしては、将来的に独立してお金（100円とか200円とか）を取れるようなところまで充実させたいなと、そういう気持ちを抱いて再開させたということはあったんですよね。

まぁ、不要論が出て、講評会に一本化されてしまい、残念な気持ちはあるんですが、考え方はそれぞれでしょうから、僕らは責任をもってきちんと作品を観ているんだというメッセージを、折に触れて出品者の側に伝えていかないといけないなと思っていますね。

木村：あの時、講評集として独立しているものではなくて、Zenの中に織り込んだんだよね。あの辺がちょと曖昧になってきたと…予算的なこともあるけれども、森さんの話にあったように、講評集は講評集として独立したものを作っていかなければならない、そのためには編集委員をちゃんと作らなきゃならないんだけど、そういうやり方でやっていけば、また違った感じになってくるんじゃない

かと思う。

森：再開した当初、担当をお願いした二人の方から同じ内容のお電話をいただいた。「どうしても一人二人について文章が書けない…どうしてもその入選作品をほめる気にならないんで…どうしよう…」ということでした。私は「それでも書いてください。落選させたかったという気持ちがあれば、そのことを書いてください。そのくらい責任があることなので、今になって逃げ腰になるのはずるい。審査の現場で落選させる努力をしてくださいと言ってお願いし、強制的に書いていただいた方がお二人おりました。そういうことは今無いですけどね…（笑い）

渡辺：ほめられたことより、くさされたりしてる方が後々残るね。そのときは何っと思うけど、後々作品を創るときには、ほめられたことより指摘されたことの方が…だから大いに指摘していいと思う。ただね、あんたは絵をやめた方がいいとかいうような書き方をした人があって、ひんしゅくをかったようなこともあったね。

木村：ちょっと使ってはダメな言葉ですね、それが活字になったら、相当強いものがある。

渡辺：本人にとっては、すごいショックだね。

森：出品した側だけが試されてるんじゃなくて、批評する側の批評能力も試されているわけです。

司会：全道展の30周年の時かな、岩船先生が「全道展はボスがいなくて良い会だと、もう一つは質の高い作品づくりとか厳しい審査とか」ということを書いていましたね。

私たちも、過去のことを知るには、過去の図録が手元にあれば見ることができるのであるが、無いですよね。山下さんが65回展の感懐に「18回展の図録が宝だ」とか書いていました。本当に薄い図録ですが、内容は濃いです。25回展、30回展、40回展、そして今回の座談会が一冊に纏まればよいですね。ところで、過去のことを知りたいということはないですかね。過去の全道展にこういう作家がいたとか、アトリエ訪問のページにも面白いのがたくさん載ってたりしましたけれど…

木村：過去のことはちょっと分からないですが、僕のことに関して言うと、40回展で会員にさせていただいて、それから30年経つんですよ。その間に、さっき言った伏木田さん達の世代から、もっといわゆる若手が入って来て、僕、川本さん、矢元さん、渡辺さん、梅津さん達が、どんどんどんどん会員になっていったんです。その間に、絵画だけでなくて彫刻の方も、素晴らしい作家が関わっていたんだけれど、亡くなったそういう大事な作家も沢山いるんですよ。彫刻で言えば、桜井さん、池田さん、小川さん、あの人達が頑張っていればまた変わっていたかもしれない。絵画でいうと、北川豊さんなんかは生きていたらどう変わっていってたか、そういう想い出に残る人がいるんですよね。そういう全道展と関わっていった仲間というか、そういう人達に何かの形で陽を当てることが、全道展の中にあってもいいんじゃないかと思うね。

司会：今、全道展のあり方を一部含めて言っていただいたきましたが、森さんはどうですか？

森：先ほど、40周年前後の話、あるいは30周年、35周年頃ですね、数十年前の話が出ていたんですけど、その頃に出品し始めた立ち位置としては、その頃はまだ過去の資料を収集しようなんて気運は全然無かった。50周年を超えた頃、全道展の50年の歴史っていうのは北海道の美術の歴史とイコールでもあるわけですよね。50周年を超えた20年くらい前から資料の収集とか保管、保存とかの必要性という気運が出てきたんじゃないのかなと思います。70周年を迎えると言うことは、ずっと先とも言えますが、わずか30年で100年という節目を迎えるわけですよ。それに向けて、そろそろきちんとした資料収集、保管保存や呼びかけ、あるいはそういったものが

そのまま北海道の美術文化の歴史の財産とイコールといいうことで、多くのみなさんに見てもらえるような環境作りがそろそろ必要になってきているんじゃないのかなと思います。

我々はまだ、創立会員の元気な姿をうっすらと覚えているわけですから、その当時のそういう姿を、美術館の学芸員さんとは違うアーティストからみた先輩の姿に対する証言であるとか、そういったものをどんどん積極的に発信し発言し、保存・管理していく必要はあるかなと思っています。そういう気運づくりをしていくのも、70周年という節目なのかなと思ってますね。

若林：今、過去の図録とかの話題がでてましたが、全道展のホームページ（当時の庶務部長：伊藤隆弘会員立ち上げ）の中に歴史っていうコーナーがあって、一部なんですけど見られるようになってるんですよね。PDFでね。それが、4～5年前にホームページ立ち上げて上手くいっているのかなと思うんですが、今の森さんの話しなんかも、今の全道展のブログ…歴史のところにどんどん付け加えていく必要があるんだと思いますね。実際に読んでる人がどのくらいいるか分かりませんけれども、5～6人しか興味ない人がいなくても残すべきと思いますね。10年20年、100年を迎える頃になったら、さらに大切なものになると思います。

司会：川名さん、これからの全道展のあり方を…彫刻を含めて。

川名：部門で言うと4部門ですよね。表現の多様化というのがあるので、全部を受け入れることは出来ないですけれども、もう少し我々も順番に対応していく必要があるのかなっていうようなこと…例えば彫刻の出品作品をみていても感じることはあります。

司会：若い人の出品は、最近どうですか。…

川名：（若い方）もありますし、年配の方とかもあるんですけれども、ちょっと彫刻じゃないような、工芸でもないなーというか。

木村：それは感じるね。立体平面の感じでね。

川名：その辺は彫刻部で受けとめていかなければならないのかなと感じますね。

司会：工芸作品では、彫刻部門でも良いかなという作品がありますが、その辺はどうですか。

石山：難しい質問なんですけれど、ちょっとこういう考え方があると言うことで、図録を主体に調べてみたんですけれど、55回展を前後して、その前は会員・会友は30名くらいいたのが55回以降、がたっと、一気に脱会があって6人くらいしか残っていない。関川さんと三好さんを中心に5～6人で動いていて、ちょっと増えてきて今8名なんですけれど、どーんと会員が辞めたことによって公募数が激減してるという歴史があって、それを復帰させるのは非常に難しいなと。将来的には来年、再来年と公募数はこれ以上伸びていくのか、中では陶芸とか鉄関係、それからガラスアート。陶芸をみると、室蘭では陶芸人口が減っている、やってる人もおばあさんかおじいさん、（作品も）小さい物で趣味の段階で、こういうところに出すという若手もいない。おじいさん、おばあさんが楽しむだけ…で、非常に厳しいなという感じ。それでどうするのかというと、まず自分を上げていかなければならない、全道展の会員だというだけではなく、挑戦する場所を本州の方に向けて、そういうことで自分を鍛える。自分自身を上げることによって見ていただいて、感じてもらえる人が一人でも増えてくれたらなという思いです。

司会：今は、陶芸とガラスと織りの3分野で、陶芸が多いですか？

石山：陶芸が一人会員になって4名、布が2人、ガラスが2人。金属、木工はまだ出てきてない。

司会：版画の方はどうですか。

竹田：版画は、会員も平均年齢が上がってい

るんですけれども、一般出品者も上がっているのが現状なんですね。もう少し学生美術全道展で版画の魅力などを、学生に伝えられたら良いのかと。審査は審査で真剣にやっているが、アピールの仕方で、先生が生徒さんを連れて来ていただけるような方向に持って行けたら良いと思いますね。

司会：学生美術全道展を経験して本展に版画を出している人が何人かいますから、続けてくれればいいと思うんですけど。

木村：今、竹田さんの言ったことも大事なことだと思うね。全道展の場合は4部門あるわけですが、高齢化は社会的なことで、この中で我々はどう考えるかということを、あまり使いたくない言葉だけれど、戦略的なものの考え方も時には必要、公募展が生き残っていくということを考えたときに、ロマンだけではもたないよね。そういったところで、会としてどういう方法論で引き込んでいくか、そういうことを事務局を通して、全員でいろんな知恵を絞り出して…もっと前からやってるべきだったけど、そういうことがすごく大事だよ。

渡辺：もう7～8年前から、今の義務教育の中で、図工・美術教育がどんどん衰退し、その現象が現れているんですよ。それは何かというと、絵とは何か、図工とは何かということは、小学校・中学校である程度のジャンルはくぐってきてたのよ。それが時間数が足りない…特に中学校なんかは週1時間でしょ。3年生はほとんどやってないという状況で、しかも美術の先生がいない。道内の大半の学校はそういう状況。中学校は、絵を描いてる学校は本当に少ない。僕は学生展講評会でも生徒にいつ頃絵を描くのが好きになったのかと聞くんだけれども、要するに小学校以来描いていないという現象が既に現れている。ということは、僕たちが若い頃の絵画観と今の若者の絵画観とは全然違う。例えば教育大というのは前は大きなベースになっていたところなんだけれど、教育大自身が、本当にきちんとデッサンをやって、油絵とか僕らのやっているような仕事をやっているっていうのは無くなっている。それが先生になっていく。今の現象でいくと美術全般が冷え込んでいく。今の若者達は、僕らの時代のような平面の作品の表現とか、彫刻なら彫刻とか、ジャンルをきちんと分けられた表現をしていたのが、今すごく曖昧になって、はっきり言えばおもちゃなんだよね。それを許しているから、高校や大学も含めてそうなんだけれど、非常に安易に…中にはすごい人もいるんだけれども…インスタレーションと称して訳の分からないものが増えているし、安易に飛びつけるんですよ、はっきり言うとデッサン力がなくても、ちょっとアイデアでやっていけば面白い、それが妙に評価されちゃうという現象がある。それが全道展で抱えられない。自分のジャンルだけではなくてね、そういう大きさを持たなければならんところに来ているなということろがある。

木村：渡辺さんが言ったことは、すごく大事なことなんだけど、我々は既成の価値観をずっと持ち続けている訳だから、来るものに対しては即応していかなければいけないということは分かるけど、すごく難しい。公募展の中で、渡辺さんが今言ったことも認識しながら審査に当たる…分からないわけじゃないけどね、それにしても良いものと良くないものはあるわけでしょ。その辺の判断をしっかり見極めていかなければならないと思うね。

渡辺：この間の札幌（国際）芸術祭にしても、黒字になったとかすごくお客さんが入ったとかマスコミではなってるけど、我々にとってみたら、えっどこが？というふうに僕なんかは思っちゃうわけね。それと同時にそういうことがマスコミではかなり取り上げるんです今、そういうインスタレーション的な運動論

みたいなものがイベントとかね、新聞でもテレビでもすごく出るんだけれども、我々のような展覧会なんてものは隅っこにちょこっと出ることにしかならんわけでしょ。世の中も、美術館自体もそうだし、そういうようなものに悪く言えば迎合しているような気がして、そんなに早く時代が変わるわけはないんだから、もっときちんと捉えて欲しいなとは思うんだよね。

司会：全道展が出来る前に道展がありましたが、戦後、道新さんから声が掛かって新しい会を作ってはどうかというような…そういう記録がありますが。

若林：そういう記録ですけど、ただ中島公園の中野邸に集まった人達は新しい美術の運動をやりたかったということはあると思うんですよね。その時はとにかく新しい団体、展覧会をやろうという、同じ頃新聞社も、戦争のことをずーと支えて来た新聞社が、新しいものを創らなきゃいけない、まあ食えない時代ですけど、文化に力を入れたいということで思ってたんですけど、そういう気持ちが上手く出会ったんですよね。

司会：あの当時は国松先生は創立会員で、創立展を開催した時もまだ国松先生は道展の会員であったわけですね。

木村：そこから分かれちゃったんだよね。丸井でやった…

若林：日本の公募展はいわゆる官展である日展があって、そこから二科が出来てきたりしますよね、地方はミニ日展みたいなものがあった。いわゆる県展というのが…ただ北海道はなかなか出来なかった。函館とか地区にはあったんですけれども。やっぱり札幌に全員集まって審査するといった物理的な問題だとかね、後はやっぱり道庁に文化的なものをやろうと人もいなかったし、戦前からボスがいなかったということもあると思うんですよ。そこで道展があって、戦後、全道展、新道展が出てきてというのは北海道だけですね。新道展の後は大きいのは出ていない、公募展とは別の動きは出てると思いますけどね。

それでもまだ、道展と全道展と新道展と三つあるのは面白いと思います。ただもっと各団体の個性がぶつかった方が面白いと思いますけどね。

司会：この後、フリートークに入りますがその前にこれだけはというのがあれば…

森：さっきの創設の当時の話、それと今年行われた札幌国際芸術祭の話しが出つつ、出品者数の減少云々、これってある程度イコールで結びつくかも…？　ありそうな気がするんですよね。

55回展が2000年だったんですけど、2000年代21世紀に入ってから、少子化問題であるとか、学校の完全週休二日制、それによって学校教育における美術や体育や音楽の時間数の減少、同時に日本全国公募団体で、出品者数の劇的な減少が顕著に表れ始めたのはその頃であり、それと同時に、もしかしたら、現代アートの人達は一生懸命努力をしたんだろうと思う。その成果としてようやく今社会的に顧みられる環境になった。僕らは批判的な言葉は投げつけられないな…と。彼らは努力したんだよな～と思いつつ、僕たち自身も創立時にはそういう優れた人がいて、熱のある人がいて、時代の気運として、文化美術社会という気運があり、そしてそれをバックアップしてくれる新聞社という存在があって、我々は存在したんだということを考えると、本当に簡単には、今現在の第1回の札幌国際芸術祭というのは批判しづらい。

将来その分野ジャンルというのがどうなって行くかはわからないけど、各種、少子化であるとか、学校教育、そして今の若い世代の動向であるとか、そういった何かを含めて、確かに2000年代に入っての典型的なそれが、いよいよこう目に見え始めて来たのが、ちょうど70周年の今くらいなのかなということで…アルコールを入れてから先を…

梅津：いいですか？　私もしゃべって。

さっき若林さんのお話しにあった、三展の特徴がちゃんと出てこなきゃいけないという

ことはすごく大事なことだと思うんですよね。このまえ川本さんと近美に行って、三展同席の来年（全道展としては70周年企画展）の会議があったときに、あるところからせっかく三展があるんだから、みんなで一緒に企画するようなこともあって良いよねという話しがあったんです。それで、全道展としては、展覧会をみてても、同じような作品が増えてきて、だんだんみんな似たようなものになって来てるので、むしろそうじゃなくて、もっとそれぞれの展覧会が個性的になっていかなきゃいけないんじゃないかと発言しました。

巡回展について

司会：先ほど梅津さんから巡回展について話してもらいたいという提案がありました。

巡回展は、第3回展からあって、第51回展で最終でした。私も木村さんも、みんな根室に行ったり中標津に行ったりしました。巡回展を見て本展に出品した人もいる。何か巡回展のことで想い出が残ることなど話しをしていただきたいんですが。

木村：やめてしまってこういうことを言うのも残念なんですが、地方の自治体が疲弊してきたんですよね。予算が付かなくなった。

大体、片道の運送代は全道展で出したわけですよ。戻ってくるときはやったところ（自治体）で出してもらってたのが、出なくなっちゃったんですよ。

そこに追い打ちを掛けるように色々な問題があって、やめちゃえっと言うことで、パッと決まったんだよね。なんでみんな賛同したのかと…

若林：僕は担当してて、僕も責任あるかなと思っているんですよ。やはり予算の問題が一つあって、それと釧路で、50回で桜井さんの作品が破損して、その時の運送会社の対応に結構時間が掛かったみたいで、面倒くさいのもあったと思う。

年に一回でも良いから、今年は帯広、来年は稚内とかでも開催して欲しいですよね。

森：それこそ美術文化を北海道に根付かせるためということで、非常に早い段階から夕張であるとか倶知安であるとか、わりとこまごまと、意外なところで地方巡回展をやってたんだよね。そこから、後々アーティストとして出てくる人がいたんだよね。

表向きは、道立美術館も、函館、旭川、帯広にも出来たし、絵画芸術とかを身近に接する社会的な基盤も整えられたことだし、そろそろその役回りも終わったんじゃないかということが、理由だったはずなんですよね。

実際には、お金も含めたトラブルのオンパレードであったかなとは思うんですがね。

今思うと、（巡回展は）そんなに悪いことではありませんでした。

僕は帯広だったんですが、道内の展覧会場としては最も魅力的な充実した、しかも民間の会場だったんですよね。十二分に前売り券も売って、そこそこ利益も出ました。結構貯金も出来たんです。お客さんが入った、そんな時代があったんですよね。

地方巡回展をやる時は、お金を出してくれる自治体に合わせて、田舎の体育館とか、一番寸法の小さい会場に合わせて作品選定をするので、帯広のカルチャーホールは会場が良すぎたために、スカスカなんですよ。トラック1台分だけでは会場が埋まらなくて、どんどん展示内容にも魅力がないよねって感じにもなっていったので…やっぱり展示内容にも魅力があって、受賞作品くらいはちゃんと来るくらいの、150号は無理としても、せめて130号以下であれば全部受賞作品は来るように。ちゃんとした会場で、ちゃんと全道展のある程度の姿をみせる地方巡回展を、一年に一カ所、あるいは数年に一カ所でいいので、持ち回りで、少々無理をしてでも、僕はやっていいと思いますね。少なくとも帯広には、そういう待望論があります

巡回展をやった折には、全力で……半分くらいバックアップをお願いしますので…

木村：地方の会員ね。例えば室蘭の会員だとか函館の会員だとか、地方で（市役所とかに）アタックしてみる…それで、どういう返事を

もらえるか分からないけれども、そういう方法でやるしか無いだろうね。

波田：巡回展でなくて、地方の人達でやってますよね。

その中に有志の人、先生方がおつき合いのある人達にちょっと呼びかけて、出してくれないかと言ったら、付き合う人は沢山いると思うんですよね。

巡回展からじゃ無くて、そういうやり方もあると思います。喜んで僕も出します。

梅津：私が事務局長のとき、なんとか巡回展を単発でもいいからやりたかったんですよ。それを引き金にすれば、何年かに一回とか、動くと思って…

それで70周年記念のときに巡回展をやりたいと言ったら、アンケートを取れってことになって、ポシャっちゃったんですけども…

それでダメになってから、ちょっと考えたのは、さっき波田さんが言ったように、その事務局サイドの、わりと小さなものでも良いんですよ。例えば、函館や十勝（帯広）、旭川など地区展を頑張って毎回やってるんですよね。そういうところにゲスト出品みたいにして、札幌の人達が何人か行く（作品と人事の交流）ってのは、考えたんですよね。

もし選抜が面倒であれば事務局メンバーでも良いんですよ。それで行って交流して、作品も出して…そういうことが出来ないのかなって思ってましたね。

波田：出来ればそこで個展もやってみたいですね。後々ね。

森：やっぱり地区展は、旭川、函館、その他いろんな地域で行われているけどね、メンバーはほとんど固定されているようなもので、足を運んで観てくれる人達も固定してしまう。新鮮味がないっていう感想がどうしても出て来ます…これは宿命です。「見飽きているおまえらの作品がまた並ぶのかいっ」ていう…（笑い）

帯広としては、巡回展をやらなくなった我々としては何とか打開したいということで、釧路と合同展をやろうじゃないかという話しは度々してました。

何とかお互いお金を貯金して、運搬費用を捻出して、一年おきあるいは二年おきぐらいに、あるときは我々帯広のものを釧路に持っていって、合同展、次の年は、釧路のものを帯広に持って来て合同展とか、帯広、釧路の合同展をやりたいう話しをしてたんですが、なかなかお金が捻出出来なかったんですよ。

それはつまり、少しでも普段と違うメンバー・作品を混ぜて、お互いに刺激をそして足を運んでお金を払って観てくれるお客さんにとっても、日頃観ることのない新鮮な作品を観たい、観せたいということで、アイデアだったんですよね。

現実にはね、釧路とのそれはね、お金の問題でポシャったようなもんなんです。もし可能であれば、札幌あるいは函館から5人10人、10点くらい織り交ぜれば新鮮な展示になる。

梅津：それを実現するには、招待作家として全道展で全部運搬費とか面倒みなきゃいけないですよね。その辺は覚悟しても良いじゃないかなと思うんですよね。

だから、始まりは事務局部長クラスだったら5人でしょ、そこから始めればいい。

木村：帯広からかな、突破口は。

森：帯広としては、5枚10枚加えたいんです。

木村：だから、最初をどうやって持って行くかだね。

梅津：渡邉禎祥さん（帯広）や近堂隆志（函館）さんと話したことがあるんですよ。

例えば地区展やる時に、地区展の代表者から、事務局に、このくらい作品を出してくれないかと依頼文を出してくれれば、事務局も動きやすいよね、というような話です。

森：帯広でやるとしたら、なんとか収支計算では赤字を出さないと言われてます。ある程度の運搬費用も出せるんじゃないかなと、それでも、行政の側にある程度補助金をお願い

しないとだめかもしれない…

木村：帯広の代表は齊藤隆博さん？

森：今年から齊藤隆博さん、素晴らしいです。

そこそこ豪腕で…（笑い）道新に対しても豪腕発揮しましたわ。

梅津：若林さんのお陰もあったんですよ。

森：あっ、若林さん、豪腕だったんですね。（笑い）

梅津：山本会計部長の意見があって、それで若林さんに相談したら、すぐ電話を掛けてくれて…

若林：実際、地元の人が全道展の他の地区の人達の作品を観る、入賞作品を観る、そして出来たら会の人と交流出来るのが目的ですよね。

波田：あとは、地方の、帯広でギャラリーとかやっている洒落たところがあって、その人方と全道展の会員の人達が交流して、2年に1回ぐらい個展をやるとかね、そういう繋がりも出来たら行く機会になるんですよね。全くそういう機会がないので…

若林：学生展の話しが出たんですけど、今年の出品目録を斜め読みすると、例えば、小樽潮陵が出さなくなりましたね。

地方から出しているのは音威子府くらいしかない…以前はもっと地方の学校があったんですよ。

巡回展やったら、学生展も出来るんじゃないのかなとか、ありますけれど…

森：学生展はちょっと別かもしれないです。あれは、スケジュールの問題で、高文連と絡んで、手一杯だから勘弁してくれという声が多いので…

渡辺：今、高校の美術の先生って、道展の会員くらいで、あといないよね。うちの地域はいない。

美術部はあるけど…違う先生で、声は掛けてるけど、到底公募展に出すのは…もっとも、絵もちょろちょろと漫画みたいのを描いているだけだけど…

波田：道展さんはデッサン会とかを巡回展をしっかりやってますね。

森：一回の体験で、結構そういう現場に関わったりする切っ掛けになったりするんだよね。

渡辺：今の移動展の話しね。行政使って会場費やなんか結構掛かるでしょ。意外と掛からない地域もあるんだよ。

例えば旭川なら、市民ギャラリー借りるとすると、何十万と掛かるんだけれども、あそこに、デザインギャラリーっていう昔の倉庫がある。あまり使ってないんだけれど、そこはちょっと狭いので、代わりばんこにやっても良いわけさ。そういうところもあるんだよね。それと網走美術館は、たぶん声をかけたら、実現可能かも。

…以外とお金掛けなくても、行政に頼まなくても、出来そうなところがあるような気がする。

木村：やっぱり、待たないで動かなきゃだめなんだよね。

森：今に限らず、昔もお金なかったんだろうと思うんですよ。

昭和30年代とか…そういった中で、本田明二さんであるとか、谷口一芳さん達が相当あちこちお願いして歩いてるんですよね。そういう話しを聞くと、もう一回、僕達あちこちお願いして歩く頃合いじゃないかなと思うんです。今、かつて全道展との関わりのあった過去の人であるとか、出来事であるとかみたいなものが遠ざかりかねない気がしています。そういった深い関わりみたいなものをもう一度掘り返すためにも、実は今、帯広市民ギャラリーで12000円の広告を出してくれと市の方にお願いしているように、市町村別でいけば、神田日勝記念館も広告出してますし、東洲館という深川市の施設も頑張ってくれてますし…そういったものが、行政が運営しているパブリックスペースであるとか、行政施設が広告を出してくれる。そういう前例を一つ二つ作れば、あっちこっちに働きかけることが出来るんですね。そうするとね、小川原脩美術館に、網走市立美術館に、広告を出しませんかってお願い出来るんですよ。広告を

出してもらいつつ、こちらからも何かお手伝い出来ることがあれば手伝うとか、一度離れてしまった距離を縮めるっていうことが出来るんじゃないかと思うんですよね。

そういったところも含めて、地方巡回展の是非も含めて、可能であれば、アイデアを…お金の問題だけじゃなくて、知恵をしぼって、まず第一段階は、こちらの方から積極的にきちんと丁寧にアプローチしていくことかなとは思っているんですよね。実は少子化その他で出品者の数が減っていくのはしょうがないです。

そういう時代になっちゃって、どこもここもそういうふうに下がって？いって…それだけのせいにすることなく、きちんと10年後も20年後もある程度、熱のある現場の雰囲気を、そういった熱のある現場を維持していくためにすれば良いことは一杯あるような気がするんですよね。

波田：金の問題ですよ。運搬費用とかね…

木村：全道展側の問題だね。

梅津：会員全員でなくて良いと思うんだよね。それで、ボランティア。

しかも、(作品が) 傷ついて返って来ても文句を言わないとか条件付けないと、厳しい…(笑い)

竹田：私も70周年にアンケート回ってきたときに、巡回展賛成した方なんですよね。

何でなくなったんだろうなと思っていました。

森：70周年事業と絡めて考えられてしまって、誤解されちゃったのさ。

竹田：私は、会計持ってた時に、そういうことも含めて、もっと地方に発信したいなという気持ちもあって、お金を作ったというのもあるんですよ。

というのは、私が何で公募展に出品したかというと、中学生の時に根室に来た、道展の移動展を観ましてですね、それが原点だったんですよ。

地方にいる若い子っていうか、初めて観る人にとってはその展覧会の充実とか大きさとか、その感動っていうのはすごく大切だと思う。

木村：今言ったのね、藤井さんから始まって竹田さん山本さんと、辣腕会計で余裕ができた。そのお金を有効に使う。今回の記念展もそうなんだけど、次は巡回展だよね。

竹田：そう思います。本当に。

森：さっき、巡回展をやめた建前の一つとして、北海道も各地に美術館、道立美術館も出来たし、美術作品、油絵や工芸・彫刻が身近なものになったから、そろそろと、そういうことも建前としてやめたんですけどね。一昨年3月くらいに、生まれ育った新得小学校で個展をやったんですよ。当時描いていた風景の油絵を、ばーっと並べたんですよ。

感想文がどっと寄せられて、読んでみると、油絵を初めて観ましたという感想が結構あって、あっそんなもんなんだと、もっと普及しているもんだとばっかり思ったら、本格的なちゃんとした油絵は生まれて初めて観ましたと…。

若林：各地に美術館が出来て、それで正規な目的を達したと言ってますけれども、その後の10年15年というのが、道立近代美術館も公立美術館も(道の財政的な事情で)作品を買うことができなくなって、地元の作家を観る機会っていうのが少なくなってるはずなんです。もちろん市町村も…

そういう意味であれば、全道展が巡回展を復活させて、地域の文化を応援するということがあっても良いと思うんですよね。

それには、北海道新聞も地域のために益々応援出来ればいいし、しようと思います。

全道展解散論

木村：全道展解散論、これが何年か前に出た話しなんですよ。

司会：50回展に出ています。その前に40回展でも、そういう解散か存続かの話しが出て

ますね。

梅津：座談会にも出てきますよね。本田明二さん辺りが話してるんですよ。

木村：みんな一生懸命なんだけれど、時代の趨勢だとか高齢化の問題だとか、なかなか出品者が増えないとかっていった時に、それでも全道展を続けていく意義とはなんだという、その辺から…

司会：創立会員が21名で、30代10名、40代が8名、50代が3名で、そういう点では今の会員の平均年齢とだいぶ違うんだけれど…その21名から、どんどん増えていって会員が20回展では100名くらいに増えたのです。そして今、会員164名くらいになって…はたして、会員がこうやってどんどん増えていくこと、それは全道展の魅力であるのか？

そして創立会員の最後の小川マリさんが亡くなった時で、本当はそこでもう全道展は解散かなという気もしないではないんですけれども…

その後、そういう先輩・先生達が興した全道展好きっていう我々が、どこまで全道展を持って行くかというのが、課題ですよね。

木村：今、川本さんが言ったんだけれども、我々の年代ね。俺とか渡辺さんとか川本さんとか、みんなね…熱くなって全道展が大好きだったんですよ。

それが、そういうのがどこまで長続きするのかということになると、これはやっぱり個人的な問題になっちゃう。

我々はみんな、梅津さんも持ってると思うんだけれど、さっき渡辺さんが言ったように、全道展に育ててもらったという気持ちはすごく持ってる。

すばらしい先輩がいて、そういう創作の仕事ってのが大事な位置を占めているということと、全道展っていう組織の問題をしっかり考えなけりゃならない時期に、そろそろ来てるんだと…

前提として解散を考えることじゃなくて。もっと全道展はこれからどうしたら良いんだってこと…そこなんだよね。

渡辺：どうしても視点が会の維持っていうか、会の活発化だとかに向いて、そのために会友・会員が多くなって行くから、レベルが低くなっても会費が納まるし、やっていけるわけ…全道展の魅力というのは、会の維持で会員を増やすとか、そういう意識じゃなかったと思う。人を育てるっていうのが大前提にあった。

木村：全道展はずっと我々の先輩からの熱い？伝統で「個」なんです。自分がいい仕事をしたら誰かがやっぱり感じてくれる。だって作家としてこれが本当だよね。

だから、その辺で考えたときに、組織を守っていきたいという考えは、全道展には当てはまらないと思うんだよ。

梅津：やっぱり、散り際とかね…やめるなんか毅然としたものとか…考えて、櫂展の仲間が集まったときに言ったら、めちゃくちゃ怒られてね（笑い）あらっという感じだったんだけれども。

そういう死に所みたいなことを、どうしても考えてしまう…私は49回展の時に会員になったんだけれど、初の総会の時にその話が出たんですよ。

びっくりした。えって感じで…こういうすごい決然とした考え方もあるんだなと思って、それ以来ずーっと胸に残ってるんですよね。

事務局やると特に分かるのは、協力してくれる人が結構少ない。まっお年寄りも多くなって、いやいやとみんなに断られて、で、名簿見てもね、本当に頼む人ものすごく少ないんですよ。

それで、私すごい悲観的になって、これはもう将来ないと思ったわけよ。

それで「櫂」で言ったら、バーンと…そしたら…言葉にすべきことではないと納得して、考え直してみたら、今のような金の掛かる図録はやめてとか、初心にかえって、極端な話し、ガリ版刷りでやるような精神で…まぁ当然会員も少なくなっていくしね、そういう手作りの全道展だったらやって行けるか

なと、有志だけで…

そういうふうに頭が切り替わってきた状態なんだけれどもね。

木村：まっ、我々はいずれ抜けてくんだけど、その中で先輩から色々言われてきて、全道展の精神みたいなものをさ、たたき込まれたわけじゃないけど、いろんな状況で教えてもらったんだよね。それをすごく感じる。

森：継続、継承という部分では、僕らは教育機関として成立してないのかもしれない。（中略）すぐに数を揃えることなく、時間を掛けて、北海道美術に、全体においてどうなのかということを考えて欲しい、ということが願いであり、過去の全道展の将来を考えた人達の願いなのではないかと思う。

エネルギーのある存在、エネルギーのある行為というものを積み重ねたいなと思う。

来年、再来年、5年後10年後とね、馬鹿馬鹿しいまでのエネルギーを一個一個の作品に突っ込んで？いくしかないのかなと思う。ダメだったらダメでいいやっていう感じでね。

渡辺：全道展なんかね、そういう集団になりたいね。

司会：それでは、今日は本当にありがとうございました。

編集者コメント

前期座談会、後期座談会とその後のフリートーキングは参加者全員が「全道展」の来し方と将来を見据えて本音で語った真実の記録である。実際はこの3倍量の記録であるが、紙面制限のため割愛せざるを得なかった。フリートーキングは「現代アート」「美術館やジャーナリズムの責任」「制作者と教育の関係」など、熱気がこもり、ワクワクするような内容であった。一部脱線・暴走するのも逆に頷首してしまうところも魅力的な作家たちだと再認識させられた。割愛せざるを得ないのは誠に残念であるが、吉川会員が苦労して再現した記録は、読者にその現場で聞いているような感覚を持たせるに違いない。前期座談会記録の竹田さん（感動で泣きながら記録した）にも併せて感謝申し上げる。

梅津　薫

60周年記念全道講評風景

60周年記念全道展表彰式・懇親パーティ